

Teaching Portfolio 2024



第 32 回 佐賀大学 ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップ
2024 年 3 月 6 日（水）～8 日（金）

佐賀大学 所属 全学教育機構
氏名 浅田 隼平
asapei@cc.saga-u.ac.jp

内容

- 1. 教育の責任 1
- 2. 教育の理念 3
- 3. 教育の方法 4
- 4. 教育の成果・評価 6
- 5. 今後の目標 8
 - 5.1. 短期目標 8
 - 5.2. 長期目標 9
- 6. 添付資料・参考資料..... 10

1. 教育の責任

佐賀大学における私の教育の責任は、大きく 2 つに分けられる。1 つ目は、担当科目等を通じた学生に対する教育の責任である。2 つ目は、組織的な教育改善の責任である。それぞれの責任について、以下に具体的に示す。

1.1. 学生に対する教育の責任

私は佐賀大学全学教育機構に所属しており、基本教養科目のうち「インターフェース科目」、「総合科目」を主に担当している（表 1）。これらの科目は、「課題発見・解決能力の分野」、「個人と社会の持続的発展を支える力の分野」に位置付けられており、「現代的な課題を発見・探究し、問題解決につながる協調性と指導力」や、「多様な文化と価値観を理解し共生に向かう力、持続的な学習力と社会への参画力、及び高い倫理観と社会的責任感」を培うことが教育目標に掲げられている。私の専門である経営学に関連するトピックを通じ、これらの教育目標を達成することが、教育の責任である。

表 1：佐賀大学での担当科目一覧（添付資料 1：各科目のシラバス）

科目名	対象 学年	種別	担当年度	受講 者数	単位 数	担当 形態
チームビルディングと リーダーシップⅠ	学部 2 年～	教養/インターフェース 科目（選択必修）	2023 年度前期 ～現在	約 50 名	2 単位	共 同 ※
チームビルディングと リーダーシップⅡ	学部 2 年～	教養/インターフェース 科目（選択必修）	2022 年度後期 ～現在	約 50 名	2 単位	共 同 ※
チームビルディングと リーダーシップⅢ	学部 3 年～	教養/インターフェース 科目（選択必修）	2023 年度前期 ～現在	約 50 名	2 単位	共 同 ※
チームビルディングと リーダーシップⅣ	学部 3 年～	教養/インターフェース 科目（選択必修）	2022 年度後期 ～現在	約 50 名	2 単位	共 同 ※
キャリアデザイン	学部 1 年～	教養/総合科目	2022 年度後期 ～現在	約 200 名	2 単位	共 同 ※
ライフデザインとセル フ・リーダーシップ	学部 1 年～	教養/総合科目	2023 年度後期 ～現在	約 200 名	2 単位	共 同 ※

※いずれの科目も全 15 回授業を複数の教員（チーム）で担当

全学教育機構の「教育課程における教育・学習方法に関する方針」の中で、「学修者の積極的・能動的な授業への参加を促す多様なアクティブ・ラーニングを実施」することや、「インターフェースプログラムに地域志向教育を導入し、社会の持続的発展と社会への参画力を支える力を養成する教育を実施する」ことが標榜されている。学生が主

体的に学ぶ環境を提供するため、担当する全ての科目においてアクティブ・ラーニングを導入することや、社会人との協働コンテンツを授業デザインに盛り込むことも責任の一つであると考えている。また、2022年9月まで在籍していた鹿児島大学においては、「地域キャリア・インターンシップ」、「チャレンジ・ビジネス」、「社会人基礎力演習」といった演習科目を担当していた。そこで培った教育方法のノウハウを、現在の佐賀大学における教育に活かしている。その理念や方法の詳細については、「2.教育の理念」及び「3.教育の方法」に示す。

1.2. 組織的な教育改善支援の責任

私のもう一つの所属先である教学マネジメント推進室は、エンrollment・マネジメント（入学から卒業まで一貫した学生支援策）を通じた「学生一人ひとりが成長実感を得られる教育」をめざし、入口から出口までのあらゆる教学データを集積・分析・可視化し、教育改善につなげることを標榜している。つまり、教学データを用いた組織的な教育改善の支援も私の責任の一つである。この責任を果たすため、2022年10月の着任から2024年3月現在までに、「教学マネジメントシステム※1」の開発・運用、「教学IR」を起点とした教学マネジメントスキーム※2の策定及び教学IRレポートの作成、「LAPシステム※3」の改善、「教学IR特設Webページを通じた教育成果の公表※4」といった取組を行っている。

- ※1 佐賀大学が全学的に収集・蓄積している教学データを用いたデータ可視化機能と、教育改善機能を融合させたWebシステムであり、学部のカリキュラム点検や教員個々人の授業点検・改善の支援を目的として開発した（添付資料2：教学マネジメントシステムイメージ）。
- ※2 教学IRデータをもとに「当該年度に全学的に取り組む具体的な教育改善テーマ」の提示と問題提起を行ったうえで、決定されたテーマに基づく学部別教学IRレポートを作成し、学部等への提供および対話を通じて全学的な教育改善を推進するスキームである。2023年12月の質保証専門委員会及び2024年1月の教育委員会に提案し、承認された。
- ※3 Learning Analytics Platform。学生個々人の単位修得状況、外部アセスメントスコア、出席率、学士力（ディプロマ・ポリシー）達成度等を可視化するシステム（添付資料3：LAPシステムイメージ）。
- ※4 特設Webページ「そのサガ、みえる」<https://www.oge.saga-u.ac.jp/mieru/>

2. 教育の理念

学生は卒業後、就職・進学といった進路を問わず、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）という言葉で表現される予測困難な現代社会で生きていくことになる。様々な組織課題や社会課題に直面しながら、肉体的・精神的な健康を保ちつつ、自分なりの人生の意義や幸せを追求することになる。このような環境の中で、学生が将来、社会や組織の中核として活躍するためには、知識だけでなく、知識を活用して課題を発見・解決する能力や、協働能力、学び続ける姿勢を身に付けなければならない。また、自身がどんな事に喜びを感じるのかといった価値基準を理解し、肉体的・精神的な健康を保つ方法を学ばなければならない。

そのため私が目指すのは、教育を通じて学生自身のウェルビーイング※を実現するとともに、学生が社会や組織で中核として活躍するための能力を培うことである。学生が自己と他者のウェルビーイングを重視し、社会や組織で中核的な役割を果たす能力を持つようになれば、彼らは自身の幸せを追求するだけでなく、社会的責任を持った意思決定を行い、持続可能な発展に貢献できるようになる。教育を通じて学生のウェルビーイングと社会的責任を育成することは、彼らが個人としても社会の一員としても成長し続ける基盤を築く。これは、将来にわたって個人の充実と社会の進歩の両方を促進する持続可能なサイクルを生み出す。

※ウェルビーイングとは、文部科学省によると「身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念」である。教育におけるウェルビーイングの構成要素として、自己肯定感、自己実現（達成感）、協働性、学校や地域での繋がりといった要素が挙げられている。

私は大学生版ウェルビーイングを、大学での学びの意義を自分なりに見出し、専門知識・技能の獲得を通じて自己成長を感じられる状態であると捉えている。同時に、学習プロセスにおける他者との繋がりから得られる達成感や自己肯定感が、新たな学びや挑戦への主体的行動を促す好循環に繋がっている必要があると考えており、教育を通じてこれを達成したい。特に、学生たち自らが人的資源管理論や組織行動論の知識を生かし、自身および周囲のウェルビーイングを実現できるよう重点を置いている。

これを実現するためには、授業の中に、知識の教授と並行して、達成感（≒成功体験）や協働性といった要素をデザインすることが求められる。私の授業デザインにおいて、特に重視して取り入れている要素は表2の通りである。また、学生が社会や組織で中核として活躍するために必要な能力を身に付けておくことは、卒業後に精神的・社会的に

良い状態を目指すうえで必須である。そのため私の授業においては、学生の課題発見能力、課題解決能力、協働能力を培うことを重視している（表 3）。なお、これらは全て、深い知識の獲得を土台としている。

表 2：授業で重視して取り入れるウェルビーイングの構成要素

構成要素	目指す学生の状態
自己肯定感	学生が今の自分にできること・できないことを適切に理解する、現状の自分をありのままに認める
達成感	学生が自身にとって少し背伸びをする必要のある課題に挑戦し、達成する
学校や地域での繋がり	学生が他者との協働に積極的に参画し、その価値を見出す
安全安心な環境	学生が授業中の発言や討論・発表に際し、失敗を恐れず挑戦する

表 3：授業で重点的に培う能力

能力	目指す学生の状態
課題発見能力	様々な視点からのごとを論理的に捉えることができる、常に自分なりの「問い」をたてる姿勢を身に付ける
課題解決能力	課題解決のための最適な方法を論理的に考案し、かつ実行に移すことができる
協働能力（リーダーシップ）	理念や方向性を示し他者を動機づけることができる、組織のパフォーマンスや他者の成長に責任を持つ姿勢を身に付ける

佐賀大学に入学する学生のうち、少なくない割合の学生が不本意入学（第一希望ではない）である。また、佐賀県の地域特性の影響もあるかもしれないが、佐賀大学生は真面目で能力があるにも関わらず、自己肯定感や自己効力感が低い学生が多いと感じている。学生たちが生き生きとして、希望を持って社会へ出ていくことができるようにするため、大学生版ウェルビーイングの実現を目指す必要性は大きい。

3. 教育の方法

私が担当する授業は全てアクティブ・ラーニングを導入しており、その活動の多くがチーム単位によるものである。学生による活動の土台となるのは人的資源管理論や組織

行動論、キャリア論等の知識であり、授業中の座学でこれらの理論を学習する。知識の獲得（座学）と知識の活用（実践）を繰り返すことにより、学習内容の定着を促しつつ、「2.教育の理念」の表3で述べた能力の養成を目指している。

座学による理論の学習とアクティブ・ラーニングによる実践は、それぞれが独立した学習活動とならないよう、1コマの授業の中で必ず理論と実践の往還が生じるよう設計している。また、授業15コマ全体を、理論の学習－理論の活用（実践）－省察による学習内容の定着という枠組みで設計している。以上の授業設計は、個－協働－個（内化－外化－内化）の学習サイクルというアクティブ・ラーニング型授業の原則を意識したものである。

私の教育理念を実現するために取り入れている具体的な教育方法について、「2.教育の理念」で示した要素及び能力に対応する形で以下に示す。

チーム分け（添付資料4：履修学生一覧_匿名化済み）

インターフェース科目においては、学生の所属学部・学科、学業成績、コンピテンシー特性（PROGテスト）といった属性等に基づき、事前にチーム分け作業を行っている。チームは授業の進行状況に応じて定期的に変更している。学生の学習成果を高める、円滑なチーム活動を促すといった意図がある。

対応する主な要素及び能力：安心安全な環境、協働能力

アイスブレイク（添付資料5：授業スライド）

学生が授業に没入するための下準備として、全ての授業においてアイスブレイクを導入している。個人で行う簡単なソロワークから、クラス全体で席を移動しながら行うアクティビティまで、クラスの規模や授業の進行状況に応じて様々な手法を取り入れている。特に2年間同じクラスで授業を行うインターフェース科目においては、アイスブレイクによる学生間の人間関係づくりを重視している。

主に対応する要素及び能力：安心安全な環境、協働能力

グランドルールの設定（添付資料6：授業スライド）

全ての授業の第1回オリエンテーションにおいて、授業のグランドルールの設定を行っている。学生の納得感や授業への没入感が高まるよう、私が一方的に指示する「守るべきルール」ではなく、学生の提案を取り入れた「目指すべきルール」というニュアンスで協同作成している。

対応する主な要素及び能力：安心安全な環境

学生自身による目標設定（添付資料7：ワークシート）

各授業には全学生が目指す到達目標を設定しているが、これとは別に、学生が個人的

な到達目標を設定するワークを設けている。また、学生自身が設定した到達目標を省察する機会を授業内もしくは授業外に設けている。学生には受動的に授業を受けるのではなく、自分なりの課題意識を持って主体的に臨んでもらいたいという意図がある。

対応する主な要素及び能力：自己肯定感、達成感

リフレクションシートとフィードバック（添付資料 8：リフレクションシート）

毎回の授業課題として、授業で得た学びを振り返るリフレクションシートを学生に課している。毎回の授業冒頭では、リフレクションシートに対する全体フィードバックを行っている。

対応する主な要素及び能力：自己肯定感、達成感

PBL（Project/ Problem-Based Learning）の導入（添付資料 9：授業風景写真）

インターフェース科目Ⅰ・Ⅱでは、教員が提示した問題（テーマ）に対する解決策を企画提案する学習プロセス（Problem-BL）を取り入れている。Ⅰのテーマは学生にとって身近な問題を設定しており、Ⅱのテーマは実際に県内企業が抱える問題を設定している。

Ⅲ・Ⅳでは、学生が主体的にプロジェクトを立ち上げ活動する Project-BL を導入している。Ⅲは企業担当者との協働による企業課題解決プロジェクトであり、Ⅳは各学生チームが取り組みたい内容や到達点を決めて主体的に取り組むプロジェクトである。

対応する主な要素及び能力：達成感、学校や地域との繋がり、課題発見能力、課題解決能力、協働性（リーダーシップ）

学生個々人とのコミュニケーション、面談（添付資料 9：授業風景写真）

教員と学生との間で適切な関係性を作るためには、学生個々人の顔と名前を覚える必要がある。そのため学生一人ひとりに専用のネームカードを用意し、授業中は首から下げてもらうようにしている。また、学生が疑問点や不安なことが生じたらすぐに質問ができるよう、Teams のチャット機能を活用したり、必要に応じて個人面談を行ったりしている。

対応する主な要素及び能力：自己肯定感、学校や地域との繋がり、安心安全な環境

4. 教育の成果・評価

4.1. 授業アンケート結果

最新の授業アンケートとして、2023 年度前期授業アンケート結果を図 1 に示す（5 点満点評価）。12 の設問のうち 11 項目で全体平均よりも高い評価を得た。特に全体平均と比べて評価が高かった項目は、設問 10「この授業では、学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動が行われていましたか」で

あり、全体平均 4.pt に対して 4.7pt であった。次いで評価の高かった項目は、設問 11「課題等の提出物に対して適切なフィードバックや解説がありましたか」であり、全体平均 4.01pt に対して 4.59pt であった。設問 12「この授業は全体として満足できるものでしたか」は全体平均 4.28pt に対して 4.52pt であった。逆に全体平均を下回っていた項目は、設問 2「授業時間外学習（予習や復習、授業時間後に行ったレポート作成など）は、1 回の授業ごとにどの程度しましたか」であり、全体平均 2.99pt に対し 2.65pt であった。

図 1：2023 年度前期担当科目の授業アンケート結果



次に個別の科目をみると、最も高く評価されていたのは「チームビルディングとリーダーシップⅠ」である。前述の設問 10 は 4.83pt、設問 11 は 4.91pt、設問 12 は 4.83 と、いずれも高い評価を得た。その他、自身の教育理念と関連する項目として、設問 9「理解しやすいように教え方や教材の工夫がされていたか」は全体平均 4.19 に対し 4.59pt、設問 5「担当教員は、あなたの質問や相談に適切に対応してくれましたか」は全体平均 4.29pt に対し 4.59pt の評価を得た。

4.2. リフレクションシートのコメント（添付資料 8：リフレクションシート）

2023 年度後期「チームビルディングとリーダーシップⅡ」授業最終回のリフレクションシートより、「コミュニケーションが前より取れるようになったが、まだまだ改善

できると思う」、「毎回毎回学びもあるし、いちばん楽しい授業だった」、「自分の持つ強みと課題点をしっかりと認識できるような期間だった」、「自分にとってこの授業はともこれからの成長につながるし、学びになる」、「グループ活動や企業との取り組みを通して自分の成長につながっていると思える」、「今回の授業で明らかとなった自身の課題を解決できるように、春休みで成長してきます」、「私の中ではとても大きな成長につながったと思う」といったコメントが見られた。

これらの結果から、表 3 で示した「授業で重点的に培う能力（課題発見能力・課題解決能力・協働性）」の伸長については判断・評価することができない。他方で、授業アンケート結果の満足度の高さやリフレクションシートのコメントから、表 2 で示した「授業で重視して取り入れるウェルビーイングの構成要素」については、ある程度の成果が得られているのではないかと考えている。

4.3. 教育改善の取組（研究・研鑽）（添付資料 10：修了証書）

- 科研「学生の汎用的能力を養成する研修プログラムの構成要素に関する研究」（2020-2023）研究分担者
- 科研「人的ネットワークが大学生のリーダーシップ開発に及ぼす影響に関する研究」（2023-2026）研究分担者
- 芝浦工業大学プレ FD「大学教育開発論」への参加（2022）
- CIAC 認定インターンシップコーディネーター取得（2022）
- 千葉大学アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成履修証明プログラム（ALPS）修了（2019）

5. 今後の目標

5.1. 短期目標

5.1.1. 客観的評価指標と取り入れる（もしくは開発する）

前述の通り、現状は課題発見能力・課題解決能力・協働性を測定する尺度を授業に取り入れておらず、これらの能力の伸長を客観的に評価することができていない。該当する指標や事例、外部試験等について学び、学生の能力の伸長を客観的に評価できるようにすることが目標の 1 つである。もし最適な指標や尺度が存在しない場合、開発に取り組む。

5.1.2. 経年データの比較による教育の評価・改善

私はまだ複数年度にまたがって同一科目を担当した経験が無い。そのため、経年データを用いた省察と授業改善を行えていない。今後、各授業に関する教学データを集

めつつ、教育改善の PDCA を回し続けていくことを目標とする。

5.1.3. 教材作成

私が担当するインターフェース科目は、PBL 型授業として、ある程度の「型」が出来上がっており、また主観ではあるが一定の教育成果をあげていると捉えている。今後は、いち授業科目としてクローズに完結させるのではなく、そのノウハウを学内に広く普及させるため、「インターフェース科目における PBL 教材マニュアル」のような形でまとめることを目標とする。

5.1.4. 教学マネジメントシステムの開発完了と社会への展開

組織的な教育改善として取り組んでいる教学マネジメントシステムについて、現時点では Ver.2 の開発まで完了している。今後、企業との共同研究という形での契約を締結し、改善を加え、教学マネジメントシステムを用いた教育改善事例を論文としてまとめて発表することを目標とする。ひいては、本システムを商品化し、全国の高等教育機関へ普及させていきたい。

5.1.5. 専任教員を目指す

現在、私は任期付きの招聘教員という立場である。教育成果の対外発信、組織的な教育改善、毎年一定数の論文の執筆といった教員としての責務を果たし、自身の資質や能力を向上させ、佐賀大学に貢献できる人材と評価されること、即ち専任教員となることを目標とする。私の現職の任期である令和 9 年度までに達成したい。

5.2. 長期目標

私の長期目標を一言でまとめると、関わったすべての学生のウェルビーイングの実現である。学生時代にウェルビーイングを実現することができれば、個人としても社会の一員としても成長し続ける基盤となる。さらに、自身だけでなく他者のウェルビーイングを重視するようになれば、彼らは自身の幸せを追求するだけでなく、社会的責任を持った意思決定を行い、持続可能な発展に貢献できるようになる。つまり、一人ひとりのウェルビーイングの実現が、将来にわたって個人の充実と社会の進歩の両方を促進する持続可能なサイクルを生み出す。

そのためにも、学生一人ひとりのウェルビーイングに向かって取り組むことが、私個人の取り組みではなく、大学関係者にとっての当たり前となるような未来を創っていきたい。組織行動論の視点が「どうやって働かせるか」から「どうやってより良く働いてもらうか」に少しずつシフトしていったように、また大学教育の視点が「何を教えたか」から「学生が何を学んだか」に少しずつシフトしていったように、少しずつ、教育を通じてその芽を育て、広げていくことが私の長期目標である。

6. 添付資料・参考資料

添付資料 1：各授業のオンラインシラバス

添付資料 2：教学マネジメントシステムイメージ

添付資料 3：LAP システムイメージ

添付資料 4：履修学生一覧_匿名化済み

添付資料 5：授業スライド

添付資料 6：授業スライド

添付資料 7：ワークシート

添付資料 8：リフレクションシート

添付資料 9：授業風景写真

添付資料 10：修了証書